

チェスの駒あれこれ

梅林 勲

主として欧米で指されているチェスは、昔は西洋将棋とも呼ばれたが、世界各地の人たちがチェスを指すようになり、また、固有の将棋を持つ東南アジア各国や東アジアの地域でもチェスを指す人々は増えている。このようなどころから今では、チェスのことを西洋将棋と表現することはほとんどなくなっている。

日本では数多くのプロが活躍する「将棋」が存在し、他の国ほどはチェスは盛んではなく、チェスの駒を見たことがない人もいるようである。そこで今回は、チェスの駒の話を少ししてみたいと思う。

現在使われているチェスの駒は「スタウントン(Staunton)」と呼ばれ、少しの違いはあれ世界各地でスタウントンの駒が使われている。欧米では、スタウントンのような形の駒は、「簡易形のチェス駒(Conventional Chess Set)」と呼ばれるが、チェスの駒のコレクターや海外からの観光客に販売することを目的にした、アメリカのアニメのキャラクターや、中世の軍隊を模したフィギアタイプの駒(Figural Chess Set)も、過去から現代に至るまでに何種作られたか分からないくらいに存在する。現在でも中国や東南アジア各国では、自国の伝統的な民族衣装をまとったチェスの駒が、代表的な民芸品の一つになっている。

ところでヨーロッパではスタウントンの駒が、最初から使われていたわけではなく、イギリス、フランス、ドイツ等の国々やその影響を受けた周辺国において、様々な地域駒が使われていた。最古のチェスの駒は、ルイスの駒と名付けられ 1831 年にスコットランドの西海岸沖合いのルイス島で発見されたもので、ルイスの駒と名付けられ大英博物館にて本物を見ることができる。同博物館のミュージアムショップではレプリカが売られているが、小さなレプリカをフィギアの海洋堂が大英博物館と提供して、販売したこともあるので知る人も多いのではないかと。ただ、私の意見ではルイスの駒は最古のチェスの駒とは言いがたいのではないかと思う。ルイスの駒は鯨の骨で作られ、スカンジナビア半島の軍隊の姿を象っているが、作られた時期は 12 世紀頃と思われる。この当時ヨーロッパの将棋は現在のチェスとは全くルールがことなり、むしろヨーロッパに将棋を伝えた中東地域のシャトランジと呼ばれるルールと殆ど同じだった。

イスラム教徒はウマイヤ朝(661 年～750 年)の間に支配地域を急速に拡大し、中央アジアから中国西部、アラビア半島全域、地中海に面したアフリカ北部からスペインまで版図を広げた。シャトランジはこれとともに広がり、西方ルートの一つはロシアにも向かい、南キエフのタマンとサーケル・ベライア・ヴィーザから骨製の 10 世紀の将棋の駒が発掘されている。その他ヴィシュゴロード、ツロフ、ミンスクなどの多くのロシアの古代都市の遺跡からも 11 世紀から 12 世紀頃の将棋の駒が発見されている。また、スペインやイタリアでは 9 世紀から 11 世紀頃のシャトランジスタイルの駒が発見されており、将棋発祥の地インドからペルシャに伝わったチャトランガ(インドでの将棋の呼び名、現在ではインドでもシャトランジという)は、シャトランジに姿を変えて、急速にユーラシア大陸からアフリカ

北部に広まったのである。ルイスの駒がヨーロッパでは最古のチェスの駒と呼ばれるのは、ヨーロッパの将棋がシャトランジのスタイルから脱皮して作られた、最古のものということ、及び発見された地がチェスという言葉を使うイギリスの近くだからであると思われる。

先にも述べたが、伝わった当時はおおむねシャトランジと同じで、クイーン(女王)の駒は存在せずクイーンに当たる駒は将軍或いは参謀と呼ばれ、駒の動きも前後に斜めに1マス進めるだけであった。現在のチェスのように大きく動ける駒はルークだけで、引き分けも多くゲームとしては限界が見え、ルネッサンス期の15世紀末にゲームを面白くするための大変革が進められた。この時に参謀に代わりクイーンが、象に代わりビショップ(僧侶)が入り、動きもクイーンは何処へでも何マスも、ビショップは斜めに何マスでも進めるようになり、ゲームのスピードアップのためポーンは初手に2マス進め、キャッスリング(王の入城)というルールも作られた。

チェスは英語での呼び名で、フランスでは「エシェク(echecs)」、ドイツでは「シャッハ(Shach)」、イタリアでは「スカッキ(Scacch)」、スペインでは「アヘードレス(Ajerez)」と様々に呼ばれ、名前が違うようにローカルルールもたくさんあったようだが、現在では国際チェス連盟(FIDE)が組織され公式の統一ルールを制定している。

ルネッサンス期の15世紀末にチェスが大変革を遂げた後、ヨーロッパの強国を中心に独特の地域駒が生まれる。ヨーロッパの人々はこれらの駒を、グローバルスタンダードとなったスタウントンと区別するために様々な名前を付けた。代表的なものの写真図と解説を末尾に掲載したのでご覧頂きたい(写真図は注が入っていないものは全て岡野伸氏撮影による)。

なお、スタウントンという駒は1849年にイギリス・ロンドンのジョン・ジャクス(John Jaques)という人物が商業生産を始めたもので、イギリスのチェスマスターであるハワード・スタウントン(Howard Staunton, 1810-1874)が、1848年に刊行した「Chess-Player's Companion」という本の中で、ジョン・ジャクスの駒を推奨したのを、ジョン・ジャクスが自身の駒を販売するとき、販売促進のためスタウントンと名付けたのが始まりと言われている。18世紀から20世紀の初頭までチェスの地域駒の中には生き残ったものもあるが、1924年、当時の世界チェス連盟(World Chess Federation)が、スタウントンを正式なトーナメント用の駒と決めたところから、スタウントンは立体的な将棋の駒のグローバルスタンダードとしての地位を確立した。

最後に付け加えておくと、地域駒華やかななりし頃は、使用する地域の駒が違うことにより、慣れていない人には駒の識別が付けにくいという欠点があった。一時期、フランスのレジエンシイやイギリスのセント・ジョージが、グローバルスタンダードとなるほどの勢いを持ったこともあるが、結局最も大量生産に向いていて、駒の識別の簡単なスタウントンに落ち着いた。

セント・ジョージ(St. George、イギリス、1830年代から1850年代)

ヨーロッパではカフェにチェスクラブがあり、チェスクラブで使われた駒は広く普及した。セント・ジョージの駒は、ロンドンの有名なチェスクラブ、セント・ジョージ・チェスクラブにおいて1850年代まで使われた駒で、バーレイコーンと共にイギリスを代表する駒の一つとして1900年代の初めまで作られていたことが確認されている。初期の駒はナイトが馬になっておらず、駒全体が小振りなのが特徴である。



セント・ジョージ(St. George、イギリス、1830年代から1850年代)



エディンバラ或いはノーザン・アップライト (Edinburgh or Northern Upright、イギリス・スコットランド、1840年代から1860年代)

セント・ジョージ或いは現在のチェスの駒であるスタウンTONのデザインを参考にして、ロンドンのメーカーがイギリス、スコットランド地方向けに作った駒である(レプリカ)。



バーレイコーン (Barleycorn、イギリス、1820年代から1840年代)

セント・ジョージと共にイギリスを代表する駒の一つで、ほとんどがアフリカ象の象牙で作られ、駒の色は現在のもので違い白と赤である。駒の名前であるバーレイコーンは、キングとクィーンの駒が渦を巻いたデザインになっているところに由来する。



ワシントン(Washington、アメリカ、カナダ、イギリス、1700年代後半)

アメリカの初代大統領、ジョージ・ワシントンが同じような駒を持っていたところから、ワシントンと名付けられるようになった。イギリスと共に北米大陸でも使われたがこの駒は、アメリカ南北戦争(1861年から1865年)の頃のものである。



セレヌス(Selenus、ドイツ、1800年代初頭)

駒の形からガーデンスタイル(Garden Style)とも呼ばれ、イギリスではチューリップスタイル(Tulip Style)とも呼んでいる。17世紀頃からドイツで使われていたもので、オーストリアやハンガリー、オランダ、デンマークといった東ヨーロッパの国やイタリアに影響を与えた。この駒は1616年にドイツで発行された「Chess or the King's game(チェス又は王様遊び)」という本で最初に紹介されたが、その著者グスタフ・セレネス(Gustavus Selenus)の名前に由来している。



セレヌス (Selenus、オランダ、ドイツ、1800 年代初頭)



オーストリアン (Austrian、オーストリア、1810 年から 1830 年頃)

ドイツの駒の影響を受けて 1800 年代後半頃までオーストリアで使われた駒である。特に固有の名前は付けられておらず、英語では単に Austrian Playing Set と呼ばれたりしている。



(http://cgi.ebay.com/Antique-Wooden-hand-carved-Chess-set-c-1830_W0QQitemZ130231532715QQihZ003QQcategoryZ19088QQssPageNameZWDVWQQrdZ1QQcmdZViewItem より)

オーストリアン・ウイネーズ (Austrian 、1910 年代から 1940 年代)

古典的なオーストリアの駒が消えた後、オーストリアの首都、ウィーンのカフェにあるチェスクラブで使われた駒で、第二次大戦前にはオーストリアでポピュラーなものであった。



レジェンシイ (Regency、フランス、1700 年代から 1890 年代)

フランス、パリのカフェ、カフェ・ド・ラ・レジェンス(Café de la Regence)のチェスクラブで使われフランス中に普及した後、全盛期にはドイツを初めとするヨーロッパ大陸全体やアメリカにまで普及した。また、フランスが植民地支配したベトナム、アルジェリア、メキシコにまで広がり、1924 年に世界チェス連盟が現在のチェスの駒であるスタウトンススタイルを採用するまでは、チェスの駒のグローバルスタンダードになるような勢いであった。スペインやメキシコでは現在でも細々と作られている。



メキシカンパルピット (Mexican Pulpit 、メキシコ、18 世紀から 20 世紀中頃)

メキシコは、スペインと短い期間だがフランスの支配を受けた。その時の宗主国の影響を受け、スペインのパルピットと呼ばれる駒とフランスのリヨン地方の駒を模した駒が作られ、人々によって使われた。スペインもフランスも 19 世紀の初頭には本家の駒が見られなくなったが、メキシコでは 1960 年代頃まで作り続けられた。



メキシカンリヨン (Mexican Lyon 、メキシコ、18 世紀から 20 世紀中頃)

フランス、リヨン地方で使われた駒を模したものの。

